

6月2日付けの日経産業新聞「長崎発輝く」の記事で紹介されました。

長崎発
輝く

システムファイブ

4月半ば、システムファイブの佐藤康彦社長は宮崎県のある農場にいた。センサーで温度や湿度、地温などを測定し、栽培管理や出荷調整につなげる農業のIoT（情報技術）支援システム開発に向けた先進事例の視察だ。

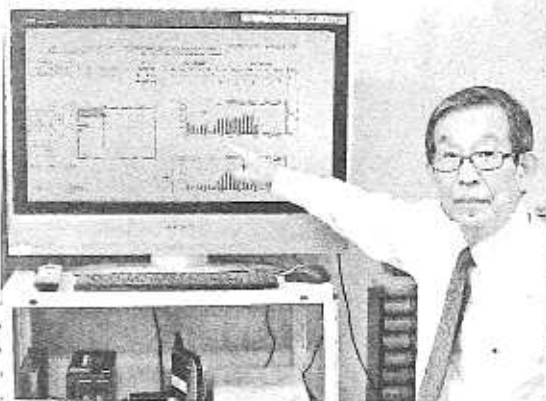
プラントの遠隔監視からオフィスの省エネ、介護施設の業務支援など、あらゆるモノがネットにつながる「IoT」をフル活用する支援システムの開発に磨きをかける。長崎では諫早の干拓地でトマトなどが大規模栽培されており、糖度の高いトマト育成などにデー

〈会社概要〉

▽本 社 長崎市葉山1の9の31
 ▼事業内容 IoTによる省エネや農業、介護支援システムの開発
 ▼従業員 24人（SFKメディカル含む）
 ▼売上高 約2億5000万円（同、2017年3月期）

農業・介護、IoTで支援

タを活用する。農業支援は重点分野の1つだ。7月には介護施設の職員負担を減らすシステムを開発する。各種のセンサーを使う見守りシステムを組み合わせ、長崎県諫早市の企業と共同開発した。ベースはシステムファイブが小規模病院向けに開発した「スイスイ・ナース」。看護師が訪問先で測った患者の体温や血圧データを病院の端末に送り電子カルテ作成などを効率化する。これを重労働で人手不足の介護施設に応用する。「サービス付き高齢者向け住宅」(佐藤社長)という。三菱重工の総合研究所長崎地区で二十数年、計測



消費電力監視システムを説明する佐藤社長

地方企業に成長の武器

やコンピューター制御を研究していた佐藤社長が独立したのは約25年前。三菱重工の長崎造船所は客船建造が苦戦、造船改革に乗り出している。佐藤社長はそれを見越して10年近く前から、同社に依存しない商品開発に乗り出した。

発電プラントの遠隔監視などを手掛けてきただけにIoTは最も得意な分野。社員のほとんどが開発エンジニアで、オフィスや工場の電力使用量をパソコンで「見える化」するシステムを拡販する。長崎県大村市の企業に東北地方の温泉熱を利用するバイナリー発電の遠隔監視システムを納入するなど、ネットを活用して地方企業が仕事を広げる武器を提供している。

地元企業との連携にも積極的だ。長崎県情報産業協会の副会長を務め、IoTや人工知能(AI)に精通した人材を育成する研究会を立ち上げた。昨年、息子が三菱重工から移り医療分野の関係会社SFKメディカル(長崎市)を任せた。佐藤社長は70歳を過ぎたがまだまだ現役。「IoTなら長崎でうちが1番」と九州中を駆け回っている。(長崎支局長 三浦義和)